

矢野龍溪の中国文化認識

——福沢諭吉との対比を中心に——

周 艶 君

An Analysis of Ryuukei Yano's concepts of China

—Contrasting with Yukichi Fukuzawa—

ZHOU Yanjun

In the early Meiji, Japan began to break away from the Confucian framework, and totally committed to accept western culture. The process of learning from the West is also the process for Japan to step to modernization. Yukichi Fukuzawa (1835-1901) is the most emphasized representative who have pushed Japan forward to the modern times.

This paper's subject is Ryuukei Yano (1850-1931) who stayed in close contact with Yukichi Fukuzawa since he enrolled Keio Gijuku that opened by Fukuzawa. In terms of eastern and western concept, we can't deny that Ryuukei Yano was influenced by Fukuzawa deeply. For Yano and Fukuzawa, they were enlightenment thinkers in same time of early Meiji, but on the other hand, there was obvious distinction between Yano and Fukuzawa's concepts of China. In order to understand Yano comprehensively and specifically, it is necessary to figure out what the difference was in their concepts of China concretely. This paper discusses Ryuukei Yano's concepts of Chinese culture, Sinology, and war by compare with Yukichi Fukuzawa.

Keywords: Ryuukei Yano Yukichi Fukuzawa concept of Sinology concept of war
Chinese culture

はじめに

明治初期、日本は儒学の枠組みから離れ、本格的に西洋の文化と思想を受容して近代の世界像を広く受け入れ始めた。欧州を遊歴した福沢諭吉は、日本を近代へ推し進める上で最も重視された代表者である。矢野龍溪は1871（明治4）年に福沢が開創した慶應義塾に入塾してから、慶應義塾系の一員として、福沢と緊密な関係が続いた。矢野の西洋文化と東洋文化の認識について、福沢の影響を受けたことは否定できない。しかしながら、西洋と東洋の文化の認識については、矢野と福沢とには明白な差異があらわれている。同じ明治期の啓蒙思想家として矢野と福沢には、東洋文化と西洋文化に対する認識に具体

的にどのような相違点があるのか、矢野のイメージを立体化するうえで欠かすことができない課題であろう。

本稿は、矢野龍溪と福沢諭吉の中国及びその文化に対する認識を「漢学観」、「戦争観」などの視点で対比し、矢野の対中国とその文化の認識を考察するものである。

一、福沢諭吉の中国とその文化の認識

1、矢野龍溪と福沢諭吉のつながり

1871（明治4）年3月4日、矢野龍溪は福沢諭吉の慶応義塾に入塾した。矢野が本格手的に洋書を読み始め、西洋文明に触れ始めたのはその時からである。慶応義塾にいた時、矢野が受けた教育の順序は、まず口授と文法書を勉強し、続いて地理書または窮理書（つまり物理学）を読み、10ヶ月ほどしてから、歴史書、経済書、文明に関する文献の講義を受けたのである。入学してから2年未満の間に、矢野は異例の速さで最上級の12級の課程を完了した。その後初級の教師また徳島分校の学長を務めた。在任していた間、自由に研究に専念することができるようになり、英米の憲法史を全巻原書で読破し、英米の政治・経済などの体制を研究した¹⁾。

福沢が率いた慶応義塾系の人々、矢野・藤田茂吉・小幡篤次郎・尾崎行雄・犬養毅・竹村良貞らは『時事新報』さらに『郵便報知新聞』を拠点にして、民権論・国会論の宣伝を展開し、明治初期の自由民権運動の動向を導いた。矢野は慶応義塾に入塾している間はもちろん、卒業した後でも、福沢と緊密な関係を持ち続けた。

1876（明治9）年1月7日、矢野は「政略篇第一 社会ノ集点」の論説で自由民権伸張を主題として『郵便報知新聞』に登場してから、自分の活動を福沢に報告したり²⁾、福沢と政治事情の相談をしたり³⁾、演説講義の開講などに協力したり⁴⁾、小幡篤次郎・江木高遠・犬養毅などの明治期開明知識人と肩を並べて論説界で活躍していた。また、最初に新聞界で活躍した矢野が政治界に進出したきっかけも福沢であった。1878（明治11）年7月、矢野は福沢の推薦によって、大蔵省に入り、官途に就いた。当時の大蔵卿大隈重信のブレーンの一員としての経歴は、矢野の生涯において重要な一部である。官途に就いてからの矢野は、政治界で活動している間も、福沢の影響を受けていた。1877（明治10）年代の前半、大隈財政の中で、矢野は横浜での洋銀騰貴に対抗するため、横浜正金銀行を通して行われた銀売りに従事し

1) 小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』（春陽堂、1930年）、105-108頁。

2) 例えば、明治10年前後、地方自治と人民参政の言論の高揚により、それを声援する県会区町会が全国で開く例が増えた。明治11年1月末、矢野龍溪は千葉県会の傍間に帰った後、福沢諭吉にその委細を報告した。（『福沢諭吉全集』17巻228頁、柴原和宛明治11年4月22日付福沢諭吉書簡により）

3) 例えば、『龍溪矢野文雄君伝』、128頁により、西郷隆盛が鹿児島を出た後、矢野龍溪は盗賊横行乱兵出沒の事態になる日に備えるために各地に「自衛の盟社」を結成すべきだと論じた。福沢諭吉と相談したが断れられた。

4) 例えば、『郵便報知新聞』明治9年10月18日付の鎗屋町講談会発会予告の記事によると、福沢諭吉・矢野龍溪・小幡篤次郎・江木高遠・井上良一の五人が銀座鎗屋町医学会を会場にして、毎週水曜日演説講義を始めるとういことが決められた。

た。この横浜正金銀行は、実は福沢が大隈重信に示した構想を発展させたものであった⁵⁾。また、1879（明治12）年に矢野が常議員としてその創立に参加した交詢社は、福沢の発案で設立された社団であった⁶⁾。さらに、矢野がその発起人として1881（明治14）年に建設された演説家の檜舞台である明治会党も福沢の発案であった⁷⁾。そして、1880（明治13）年12月、伊藤博文・井上馨・大隈重信三人が合意して政府公布日誌の発行を福沢に依頼した。翌年3月、矢野は福沢の依頼で「公布日誌草案」を起草した。

矢野が起草者として執筆した交詢社憲法草案と後の大隈国会開設奏議は、その内容において、伊藤博文の思想との衝突があり、「明治14年政変」の一因となった。そのため、大隈重信が辞表を提出した後、政府に追われたのは、矢野を始め、犬養毅・尾崎紅葉ら大隈派と、中上川彦次郎・津田純一ら福沢系の一連の官僚たちであった。福沢も政府要人と絶交した。矢野は福沢及び大隈重信とは禍福を共にする間柄であった。

慶応義塾、交詢社、『時事新報』は福沢が創立した三大事業と言われる。この三大事業の中で、矢野は慶応義塾と交詢社の重要な参加者として、慶応義塾の運営と交詢社の建設に影響を与えた一方で、矢野が「我輩はかうして半世を政治生活に送った、初めは先生の橋渡しで、大隈さんの帷幕に参じた訳で、我輩半世の公生涯を顧る時、此二人は終生忘る可らざる関係にあった。」⁸⁾と述べたように、福沢の存在は矢野の生涯に深く影響を及ぼした。

2、漢学観

福沢諭吉の父百助は豊前中津藩の儒者であり、経義詩文をよく読んだ。福沢は十四五歳前には読書を好まず、経義詩文に触れることも少なかったが、十四五歳の時、近隣の子供に影響されて、塾に通い、本当に読書しようと思いはじめた。その後、福沢は中津藩士服部五郎兵衛で初めて経史の学を受け、そのうち塾も二三度かえたが、最も長く漢籍を習ったのは白石常人の処であった。そこで四、五年間通い、経書を専ら学習し、『論語』、『孟子』のほか、『詩』・『書』・『蒙求』・『世説』・『左伝』・『戦国策』・『老子』・『莊子』などの講義を聞き、経義の勉強に努めた。また、『史記』・『前漢書』・『後漢書』・『晋書』・『五代史』などの歴史書も読み、特に『左伝』が好きで、面白いところを暗唱していたという。

1855（安政元）年、二十一歳の福沢は蘭学に関心を寄せ、長崎に遊学した。1886（明治19）年、学生に演説をしていた時、福沢は「当時横文を読むの業は極めて六かしきことにして容易に出来難き学問なりしが故に之を勤めたることならん。……或洋学ならで他に何か困難なる事業もありて偶然に思ひ付きたらば、其方に身を委ねたるやも知る可らず」と吐露し、そこからみれば、福沢は深く考慮したのではなく、ただ難しいことに挑戦することが好きだという気風で洋書を読み始めたと推察できる。長崎遊学の後、大阪の緒方洪庵に師事して医術を学んだ。この塾にある漢方医がいた。福沢はこの漢方医のことを憎むあまりに儒者まで嫌うに至り、やがて中国一切を排するというようになっていったという⁹⁾。これ

5) 野田秋生『矢野龍溪』（大分県教育委員会、1999年）、54頁。

6) 交詢社『交詢社百年史』（交詢社、1983年）、14頁。

7) 前掲、交詢社『交詢社百年史』、115—116頁。

8) 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七卷（大分県教育委員会、1996年）、490頁。

9) 三浦叶「福沢諭吉とその漢学観」（『斯文』第58号、1969年）、18頁。

こそが福沢が中国に好感がない一因であろう。

1859（安政6）年7月1日横浜が開港して間もなく、福沢は横浜に見物に行き、そこでは英語が用いられ、自分が今まで学んだオランダ語が全く通じないことに衝撃を受けた。そこで、英語の必要性を痛感した福沢は、蘭学から英学に転向すると決心した。1860（安政7）1月19日から渡米、同年6年23日帰国した福沢は、帰国後、アメリカで購入した広東語と英語の対訳書である『華英通語』の英語にカタカナで読み方を付け、広東語に日本語の訳語を付けた『増訂華英通訳』を出版した。これは福沢が初めて出版した書物である。「漢学の前座」から蘭学に転じ、更に英学にたどり着いた福沢は、『華英通語』を出版した後の一生をとおして漢学反対の思想を貫いた。その態度を具体的にいえば、まず『福翁百話』では、

漢学洋学共に学問の名あれども、人間の居家処世より文明の立国富強の辺より論ずるときは、古来我国に行はれたる漢学は学問として視る可らず。我輩の多年唱導する所は文明の実学にして、支那の虚文空論に非ず。或る点に於ては全く古学流の正反対にして、之を信ぜざるのみか其非を發き其妄を明にして之を排けんとするに勉むる者なり。此一段に至りては和漢古今の学者に対しては勿論、孔孟の言と雖も通過を許さざる者なり¹⁰⁾。

と語ったように、福沢は文明の立場から、浮文的な漢学は実学ではないと論じた。また、『文明論之概略』巻之五に、

斯の如く古を信じ古を慕ふて毫も自分の工夫を交へず、所謂精神の奴隸（メンタルスレーヴ）として、己が精神をば挙て之を古の道に捧げ、今の世に居て古人の支配を受け、其支配を又傳へて今の世の中を支配し、洽ねく人間の交際に停滞不流の元素を吸入せしめたるものは、之を儒学の罪と云ふ可きなり。¹¹⁾

に述べたように、儒学は人間交際の理を論じ、礼楽六芸のことを説き、戦乱時代に国の安定に功があるが、変通改進の理を知らないので、人間の精神を束縛する罪があると漢学の尚古思想を非難した。さらに、『文明論之概略』巻之六に、

結局、其眼目は礼楽征伐を以て下民を御するの流儀にて、情実と法律と相半して民心を維持せんとするものなれば、逆も今の世の有様に適す可らず。若し其説をして行はれしめなば、人民は唯政府あるを知て民あるをしらず、官あるを知て私あるを知らず、却て益卑屈に陥て遂に一般の品行を高尚にするの場合には至る可らず¹²⁾。

10) 福沢諭吉「半信半疑は不可なり」（『明治文学全集8・福沢諭吉集』、1901年）、167頁。

11) 福沢諭吉『文明論之概略』第五卷（岩波書店、1995年）、233頁。

12) 前掲、福沢諭吉『文明論之概略』第六卷、275-276頁。

と儒教は子弟小弱を戒めて長上の貴族士君子を戒めないため、下民を制御するものであり、貴族官僚の不品行を弁護するものであると儒教に反対した。儒教は男子の不徳、男尊女卑の風俗をなし、貴族官僚の不品行の助言をあわせて社会全般の不品行の基盤になるものであると儒教の罪を語った。福沢の漢学不信仰、儒教批判ひいては儒者敵視はここからよくうかがえる。そして、孔子に対する福沢の認識は、

畢竟、孔子も未だ人の天性を窮るの道を知らず、唯其時代に行はるる事物の有様に眼を遮られ、其時代に生々する人民の気風に心を奪はれ、知らず識らず其中に籠絡せられて、国を立てるには君臣の外に手段なきものと臆断して教を遺したるのみ¹³⁾。

とあるように、否定的である。『文明論之概略』卷之二において、儒教は空論で時代の流れに従って変通しないと論じた。さらに、孔孟の位置を是認し、孔孟は「古来稀有の思想家」と評しながらも、儒教の「政教一致」を批判した。最後に、

孔孟は此時代に在て現に事を為す可き人物に非ず。其道も後世に於ては政治に施す可き道に非ず。理論家の説とヒロソヒイ政事家の事ポルチカルマタルとは大に区別あるものなり。後の学者、孔孟の道に由て政治の法を求る勿かれ¹⁴⁾。

と結んでいる。福沢が漢学を徹底批判したため、孔孟崇拜者から憎悪されたが、そのことについて福沢は自伝の中では、

私はただ漢学に不信仰で、漢学に重きを置かぬだけではない。一步進めていわゆる腐儒の腐説を一掃してやろうと若い頃から心がけていました。そこで尋常一様の洋学者・通詞などというような者が漢学者の事を悪くいうのは当たり前で、あまり毒にもならぬ。ところが私はずいぶん漢学を読んでいる。読んでいながら知らない風をして毒々しい事をいうから憎まれずにはいられない。……かくまでに私が漢学を敵視したのは、今の開国の時節に古く腐れた漢説が後進少年生の脳中にわだかまっては、とても西洋の文明は国に入ることができないと、あくまで信じて疑わず、いかにもして彼らを救い出して我が信ずるところへ導かんと、あらゆる限りの力を尽くし、私の真面目を申せば、日本国中の漢学者はみんな来い、俺が一人で相手になろうというような決心であった¹⁵⁾。

と自分の心境を語っている。また、『学問のすすめ』においては、

後世孔子を学ぶ者は、時代の考を勘定の内に入れて取捨せざる可らず。二千年前に行はれたる教

13) 前掲、福沢諭吉『文明論之概略』第一巻、64頁。

14) 前掲、福沢諭吉『文明論之概略』第一巻、92頁。

15) 小泉信三『福沢諭吉』（岩波書店、1966年）、90頁。

を其儘に、しき寫しして明治年間に行はんとする者は、共に物事の相場を談ず可らざる人なり¹⁶⁾。

と孔子の時代は天下の人心を維持するために束縛する権道しかなかったが、後世に孔子を学ぶ者は時代を考慮に入れて取捨すべきであると語り、福沢の文明学の立場から社会改新と民衆啓蒙に努めた思想家の面影がうかがえる。

3、脱亜論

脱亜論は福沢のキーワードとして福沢批判の最も大きい論点である。周知のとおり「脱亜論」は1885(明治18)3月16日に福沢が創刊した『時事新聞』の紙上に掲載された無署名の社説である。本文はカタカナと漢字で表記され、400字詰の原稿用紙で約6枚の分量である。「脱亜論」は1933(昭和8)年に石河幹明編『続福沢全集』第2巻に収録され、従来福沢が執筆したものと考えられていたが、1960年代の後半¹⁷⁾になってから、脱亜論が一般的に知られるようになり、その執筆者に関して疑義が呈されるようになった¹⁸⁾。平山洋の『時事新報』論説カテゴリー分けの分析¹⁹⁾によると、「脱亜論」の立案者を判明するのは難しい。そうだとすると、福沢論吉が添削校訂をした可能性もあるため、「脱亜論」は福沢と無関係とは言い難いと考えられる。

「脱亜論」が掲載される前、清仏戦争で清国の領土が侵略され、西洋列強による東南アジア侵略の気風が高まり、アジアは危険に晒されていた。「脱亜論」はこのような時代情勢のもとで公刊された。

その内容とは、「世界交通ノ道便ニシテ、西洋文明ノ風東ニ漸シ到ル處、草モ木モ此風ニ靡カザルハナシ、蓋シ西洋ノ人物古今ニ大ニ異ルニ非ズト雖ドモ、其舉動ノ古ニ遲鈍ニシテ今ニ活發ナルハ唯交通ノ利器ヲ利用シテ勢ニ乗ズルガ故ノミ」という書き出しから始まり、このような西洋列強による東洋侵略の気風に対して、これを防ぐためには、精神的な覚悟を固めることが重要であり、国家の独立のためには、科学技術の革命の波に進んで身を投じ、その利益だけでなく不利益までも受け入れるほかはないと論じた。続いて、西洋の科学技術革命について日本人が知ったのは、ペリーの黒船以来であって、これによって、国民も次第に、近代文明を受け入れるべきだという認識を持つようになったと論じ、科学技術を利用しつつ互いに激しく競いながら世界に飛び出した西洋人たちは、東洋の島国が旧体制のなかにひとり眠っていることを許すほどの余裕を持ち合わせてはいなかったと述べた²⁰⁾。また、

我日本ノ士人ハ国ヲ重シトシ政府ヲ輕シトスルノ大義ニ基キ、又幸ニ帝室ノ神聖尊嚴ニ依頼シテ斷シテ、舊政府ヲ倒シテ新政府ヲ立テ國中朝野ノ別ナク、一切萬事西洋近時ノ文明ヲ採リ獨り日本ノ舊套ヲ脱シタルノミナラズ、亞細亞全洲ノ中ニ在テ新ニ一機軸ヲ出シ主義トスル所ハ、唯脱亞ノ

16) 福沢論吉『学問のすすめ』(岩波文庫、2008年12月)、138頁。

17) 東谷暁・平山洋「東谷暁インタビュー：平山洋 福沢論吉「脱亜論」の真実」(『表現者』3、2005年)、64-79頁。

18) 井田進也『歴史とテキスト西鶴から論吉まで』(光芒社、2001年)、82-85頁、239頁。「脱亜論」は高橋義雄起草・福沢論吉加筆または福沢論吉単独執筆のものだという。

19) 平山洋『福沢論吉の真実』(文藝春秋、2004年)、80-85頁。

20) 富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十巻(岩波書店、1971年)、238頁。

二字ニ在ルノミ²¹⁾。

と全てのアジア諸国に先駆けており、近代文明の受容とは、日本にとって脱亜という意味でもあったと表明した。さらに、アジア外交を評する場面において、一つの村の村人全員が無法で残忍であれば、たとえ一人がまともでそれを咎めたとしても、村の外からは同じに見えると例え、韓国と中国の存在は、日本にとって大いなる不幸だと評した。最後に、

左レバ今日ノ謀ヲ爲スニ我国ハ隣国ノ開明ヲ待テ共ニ亞細亞ヲ興スノ猶豫アル可ラズ。寧ロ其伍ヲ脱シテ西洋ノ文明国ト進退ヲ共ニシ、其支那朝鮮ニ接スルノ法モ隣国ナルガ故ニトテ特別ノ會釋ニ及バズ。正ニ西洋人ガ之ニ接スルノ風ニ從テ處分ス可キノミ。悪友ヲ親シム者ハ共ニ悪名ヲ免カル可ラズ。我レハ心ニ於テ亞細亞東方ノ悪友ヲ謝絶スルモノナリ²²⁾。

と気持ちにおいてはアジアの悪友と絶交すると公言するに至った。

ヨーロッパは文明であり、アジアは野蛮であるとみなし、日本はアジア諸国との連帯を拒否し、不利益があっても、欧米近代文明を積極的に受容し、西洋列強と同様の道を選択すべきだと主張する「脱亜論」のアジア認識は、明治維新の文明開化政策の実施と、近代化意識の萌芽および甲申政変（1884年）という時代背景があるので、国民のアジア認識をある程度主導していたといえる。実は「脱亜論」が掲載される前に、福沢が主宰した『時事新報』は、1885（明治18）年2月23日－2月26日付「朝鮮独立党の処刑」を掲載し、3月16日に「脱亜論」を掲載した後、8月13日に社説「朝鮮人民のためにその国の滅亡を賀す」を掲載するに至った。無署名の社説が多いので、いずれも福沢が執筆したものだと判定しにくいのが、福沢が主宰した新聞に掲載されたので、一定程度は福沢の立場を示していると考えられる。

これらの論説に対して、例えば、『朝日新聞』に「福沢論吉 アジア蔑視広めた思想家」（2001年4月21日）を掲載した安川寿之輔のように、福沢にアジア蔑視者というレッテルを貼った人がいた²³⁾。安川寿之輔に対する反論として、平山洋の「福沢論吉 アジア蔑視していたか」（2001年5月12日）においては、「福沢論吉の評論で蔑視されているとされた「朝鮮人」や「支那人」とは、民族全体のことではない。……批判の対象となっていたのは、政府の指導部にすぎない²⁴⁾」というような弁護もあった。これがいわゆる安川・平山論争である。福沢が中国・朝鮮の支配層と人民を区別していると主張した平山洋氏でも、福沢が「朝鮮独立党の処刑」や「脱亜論」さらに「朝鮮滅亡論」において、中国や朝鮮を批判しているのは事実だと認識している²⁵⁾。

21) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十卷、239頁

22) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十卷、239頁

23) 安川寿之輔「福沢論吉 アジア蔑視広めた思想家」（『朝日新聞』、「私の視点」欄）、2001年4月21日。

24) 平山洋「福沢論吉 アジアを蔑視していたか」（『朝日新聞』、「私の視点」欄）、2001年5月12日。

25) 平山洋『アジア独立論者福沢論吉 脱亜論・朝鮮滅亡論・尊王論をめぐって』（ミネルヴァ書房、2012年）、310頁。

4、日清戦争観

福沢諭吉は代表的な対清主戦論者であった。日清戦争が始まる前に、福沢はすでに戦争を誘導する世論を喚起し始めた。特に1894（明治27）年6月に入ってから、福沢は「我居留人民の生命財産を保護せんことを願ふのみ」（6月5日）²⁶⁾、「公使館領事館並に居留人民保護の爲め出兵の議に決し」（6月12日）²⁷⁾などのように「居留人民の保護」という口実で清との開戦を強く訴えた。その後、「本来我出兵の目的は居留人民保護の爲めにして、…京城釜山間の鉄道を敷設せしむるは、朝鮮の進歩の爲め日本立国の爲め是非とも必要の処置にして、…朝鮮の文明を推進せしむるが爲め、…此際の好機会に其方針を決して実行せんこと」（6月17日）²⁸⁾、「我出兵は人民保護の爲め、…文明事業の推進…電信の架設、鉄道の敷設…郵便なり、警察なり、財政なり、兵制なり…与に文明開化の事を共にして、…我兵は決して引揚ぐ可らず」（6月19日）²⁹⁾のような「文明事業の推進」という口実を追加した。この間、諭吉は終始、『時事新報』に様々な言論を掲載し、熱心に政府を励まし、戦争の遂行を唱えた。

開戦後でも、福沢は「文明」の言葉をしきりに用い、侵略戦争を合理化するために、世論の網を構築した。「今度の戦争は…文野明暗の戦…世界文明の爲めに戦ふもの…四億の人民をして日新の余光を仰がしめんとせば、是非とも長駆して北京の首府を衝き、其喉を扼して…彼等をして文明の軍門に降伏せしむるの決断なかる可らず」（8月5日）³⁰⁾、「文明の立国の必要より、…軍備拡張…増税は事の第一着手にして、…今日の実際に於いては天下の人心断じて軍備拡張に反対するものなし。」（1894年8月30日）³¹⁾などのように、「文明人道の保護」、「世界の文明の爲め」、「日本の兵は文明の兵」、「文明開進の爲め」、「文明世界の立国」の言葉は文章上に溢れている。福沢が文明史観の立場で勝手な論理で侵略³²⁾を合理化させようとしていたことは明らかである。

また、福沢は日清戦争に対して強硬策を主張した。その表われとしては、福沢は講和調停に対して終始消極的な姿勢を示した。1894（明治27）年9月15日、平壤戦争が開始し、一夜の激変を経て、日本は戦略要地の「玄武門」と「牡丹台」を占領し、戦争勝利の決定的な条件を獲得した。それに続き、9月17日、日本は勝負を決する一戦、つまり黄海海戦に勝利した。ここで、欧米諸国は日本と清国の講話を勧告した。福沢はこの講話勧告に対して、「飽までも追窮していよいよ北京城に攻入り、…彼の皇帝を擒にし大臣親王以下を捕獲して軍門に降伏せしむるの外なきのみ」（1894年12月20日）³³⁾と講和に消極的な姿勢を示した。しかし、欧米諸国の講和勧告と調停の圧迫によって、12月31日、福沢は「旅順口を東亜

26) 富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻（岩波書店、1971年）、393頁。

27) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、402頁。

28) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、411頁。

29) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、415頁。

30) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、500頁。

31) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、281頁。

32) 今日の時点で、戦争の結果を考えると、戦争の性質が侵略であるが、開戦の段階では、当時としては侵略戦争ではないという見方もある。本稿では論争の性質を別にして、今現在最も普遍的な認識に立って、「侵略」戦争の言い方をする。

33) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢諭吉全集』第十四巻、672頁。

のシブラルターと為し…金州大連湾を日本領北支那の香港と為すは日本紳商の任務なり」³⁴⁾という条件を提示して講和に同意する意向を示した。ただし、1895（明治28）年1月日本政府側が澎湖島作戦を持続すると、福沢はその意向を迎合し、1月17日に「第一、我軍費の実数を償ふ為めと、第二、…殖産社会を荒らして全国民に軽からざる損害…第三、彼れが無名無法の師を起こして敢て我れに敵したる其謝罪…何千万両に非ずして何億を以て計ふる数…又戦に勝て土地を取るは自然の結果」とさらなる条件を加えた。1895（明治28）年3月12日、また「償金は何十億にても苦しからず」と題して、「日本国人に満足を与え、外は以てチャンチャンの役人を悦ばしめん」と清国への軽蔑を表しながら、膨大な賠償金の支給を清国に要請する世論の展開に準備した。

さらに、福沢は日清戦争の合理化を宣伝し、強硬な主戦論を押し通しながら、アジアへの軽蔑意識を露骨に吐露した。戦争が始まる直前に、福沢は「兵力を用いるの必要」に、「改革に兵力は無用なるに似たれども、文明流の改革を悦ばざるは未開国人の常…朝鮮人…上流は腐儒の巢窟、下流は奴隷の群集」（1894年7月4日）³⁵⁾、「北京政府は李鴻章の意見を容れていよいよ開戦に…恰も火に入るの蟲」（1894年7月10日）³⁶⁾、「支那の腐敗軍を一撃の下に打破り」（1894年7月15日）³⁷⁾と発言し、宣戦布告の後、「彼の無神経の老大人を懲戒して…直ちに北京を指して是を占領す可し。…必ずしも首府の占領のみに限らず。」（1894年8月9日）³⁸⁾、「軍律なき軍隊は烏合の衆にして、…盲目の杖を振ふに等しきのみ、…乞食流民の徒…下朗輩…乞食流民隊…」（1894年9月23日）³⁹⁾などのような軽蔑に満ちた様々な言葉を用いている。

ここで、注意すべきなのは、福沢の対中国とその文化の認識が終始変わらないとも断言し難いことである。宮嶋博史⁴⁰⁾によると、福沢は『文明論之概略』を著した時、まだ中国に切実な関心を持っていない。朝鮮の開化派との交流を契機として、朝鮮の文明化を後押ししようとする時、それを妨げた清国に疑念を抱いた。その後、1884（明治17）年、朝鮮の甲申政変が失敗したため、朝鮮に対する清国の支配力が強化された。その後始末として締結された天津条約により、中国と日本との対立が棚上げされた状況の中で、福沢の中国観は新たな展開に入り、悪い方向に傾いた。さらに、1894（明治27）年に日清戦争が発生する前後、福沢の中国批判はピークに達し、この戦争を文明と野蛮の争いと位置づけ、中国に対する蔑視的感情を表明した。しかしながら、晩年の福沢は「飽くまでも旧来の関係を忘れずして、旧師国、旧恩人を以て之を遇し、あらん限りの力を尽くして彼の求むるところに応じ、其足らざる所を助けて、幾千年来の恩師に酬い、今後互に文明の事を共にして真実兄弟国たることを期す可きのみ」⁴¹⁾と述べたように、態度の変化を見せた。

福沢の中国観には時期的な変化があり、特に「脱亜論」に見られるアジア蔑視は甲申政変の失敗とい

34) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、681頁。

35) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、435頁。

36) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、449頁。

37) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、460頁。

38) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、506頁。

39) 前掲、富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十四巻、573頁。

40) 宮嶋博史「文明史から見た日本史」、『日本歴史22・歴史学の現在』（岩波講座、2016年）に収録、5-40頁。

41) 富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十六巻（岩波書店、1971年）、479-480頁。

う時代背景によるところが大きい。また、従来の研究では、福沢の中国認識と朝鮮認識と一緒に論じ、区別しない傾向も見られるが、やはり福沢の生涯を概観すると、中国批判の態度を明らかにしたこともあり、矢野龍溪のアジア認識とは異なると考えられる。例えば、当時の朝鮮の歴史の複雑さや、福沢と朝鮮開化派との出会いという契機もあるため、福沢は朝鮮に対する関心が強かった。それに対して、矢野の国際関係論説などで、最もよく論及したのは中国であり、朝鮮のことにはほとんど言及していない。それはそれぞれ自身の体験、即ち矢野の駐清公使の在任と福沢の朝鮮開化派との出会いに原因があると考えられる。しかし、ここは二人の顕著な差異ではないので、本稿では詳しく論じない。

また、福沢諭吉が1885（明治18）年3月「脱亜論」を『時事新報』に掲載した時、矢野龍溪は欧州遊歴中だったので、脱亜論の存在は知らなかったと考えられる。その後も矢野が脱亜論に言及する資料は見つからない。当時の「脱亜論」は、一般人が討論するほど世に知られたものではなかった。従って、「脱亜論」について、二人の認識を対比することはできないので、次は矢野龍溪の「漢学観」、「戦争観」、「中国文化の注目」という三つの方面から矢野の対中国とその文化の認識を考察する。

二、矢野龍溪の中国とその文化の認識

1、漢学観⁴²⁾

矢野は「余嘗て曰く、西洋の科学、印度の哲学、支那の文学、は世界の三絶なり」⁴³⁾と支那の文学を高く評価した。特に、「支那」文学の基盤である漢詩に非常に興味があり、漢詩の愛好家であった。『西遊漫記』、『出鱈目の記』、『龍溪隨筆』などには、多くの漢詩が引用された。矢野は引用した詩の作者は、名士「唐伯虎」、文人「蘇東坡」、「文衡山」、「王陽明」、謀臣「劉基」、帝王「宋太祖」など幅広く、中国の詩人を尊敬している気持ちがうかがえる。例えば、王陽明に対して、「支那歴代の学者中にて、先生の如く覇気の満ちたる人なし、今日より見れば、其の学説、通ぜざる所ありとするも、兎に角、良知良能を押し立て、刻苦して之を己れに求むるの学風は、又一種の妙味あるに似たり、故に世務に当り事を所するに至ては、宋儒輩の道学一片の窮屈なるが如きにあらず、其の宸濠を誅し功を立てし前後の働を見るに、なかなか普通道学先生の手際にあらず頗る変通あり」⁴⁴⁾と先生として尊称して、その事跡を深く分析した。

そして、矢野はしばしば自らで詩を作って心境を表している。慶應義塾時代に読書に耽る光景を描写した「兀々客愁不得眠、孤灯明滅雨簫然、夜半時有関心事、蹶起読来財政篇」や、「明治14政変」の挫折にもたらされた失意を表した「読書粗知政理真、素心偏冀庶政新、不辭刀鋸與鼎鑊、半生甘受幾酸辛、読書粗知名節重、豈以窮達恥此身、千古常多傷心事、男兒何必説沈淪、人生読書艱難始、告君勿為読書人」、そして政界引退を公表した後に夢のような人生を感嘆した「笑臨清溪鑑衰影、似否当年慨世人」な

42) 矢野龍溪の「漢学観」については、拙稿「矢野龍溪の西洋と東洋に対する認識の一考察」（『東アジア文化交渉研究』第10号、2017年）、pp637-655で論じた。

43) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、162頁。

44) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、172頁。

どがある⁴⁵⁾。また、矢野は「千数百年來、歴代皆な此の如しと云はば西洋人などは信ぜざる程の事なり、然れども事實は事實なり、西洋にてポエツト（詩人）らしき者は実に寥寥たるに一國満潮の吏員、皆な詩人の資格ありとは実に驚くべき国柄と云ふの外なし」⁴⁶⁾と中国歴代の官吏役人が詩賦文章に係る試験を受けるために、皆が詞藻を巧みに操ることを甚だ賛美した。

矢野が中国文学を賛美するもう一つの一面は、中国の古典名著である。例えば、矢野は西洋の小説と対比しながら、中国古典名著作「西遊記」を高く評価した。

世界にて、小説の最も奇なるものは、西に「アラビアン・ナイト」あり、東に「西遊記」あり、人或は前者を以て、後者に優れりを説く、然れども或る場合に於ては、却て後者の優れるを見る。

東洋にて三大奇書の一と称せらるる程ありて、西遊記の如く、奇々怪々にして快潤なるはあらず、一たび之を繙けば、殆ど塵世の外に出る思ひあり、唯是れ、喜と笑との外は、何等悲哀の調あること無し、此の如きは東西の小説中、実に稀れに見る所、其の一節一項、悉く奇想天外より落ち来る、此の作者は殆ど不可思議の脳髓を有すと評して可なり。然れども、よく考ふれば、人類の想像なる者も、何か拠り所なくては叶はぬものと見え、此書の如きすら、其趣向の中、著者全くの創意に属せずして、他より之を得來りしに似たるものあり⁴⁷⁾。

2、戦争観

日清戦争が始まった頃、矢野はすでに宮内省⁴⁸⁾で3年間過ごしていた。その時の矢野は政治と国際事情に関する言説が見つからない。1894（明治27）年頃は矢野が宮内省の職務と錦城学校校長を担当するかたわら、文学会に出席したり、知己の徳富蘇峰、山路愛山、井上哲次郎を招いての文学談や歴史談義、明治美術会会員として例会に出席したり、森田思軒らの青年文学会の後援をしたりして、文学的な生活を十分に満喫している。例えば、1894（明治27）年3月28日付徳富蘇峰宛の書簡に、「偕御清暇ニ候ハバ来ル卅一日（土曜）午後五時ヨリ愛山、停春楼両君御同伴御來臨奉願候。久敷振ニテ史談会相催申度候。」と徳富蘇峰・山路愛山を招いた。他には、1894（明治27）年9月17日、伊藤博文に輸入船買い入れの件で、岩田武雄⁴⁹⁾差し立ての旨を記した書簡を送った。10月2日、伊藤博文に岩田武雄を引見することについての書簡を送った。1895（明治28）年4月19日、伊藤博文に下関条約の締結を奉賀する発信との三件書簡以外、矢野が日清戦争と国際事情についての発言した資料は見つからない。

この三件の書簡については、1894（明治27）年9月17日⁵⁰⁾と10月2日⁵¹⁾付の書簡は具体的な事情と意

45) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、73頁。

46) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、162頁。

47) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、212頁。

48) 宮内省入りの発令は1890年11月25日である。

49) 矢野家の次男矢野武雄であり、矢野龍溪の弟である。1890年、東京市赤坂区表町三丁目の岩田家に入籍した。1881年に三田予備校のち三田英学校（現錦城学園）を創設した。

50) 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第八巻（大分県教育委員会、1998年）、6-8頁。

51) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第八巻、8-9頁。

見を述べるだけで、1895（明治28）年4月19日の書簡は契約締結についての喜びを表した。内容は次のようである。

奉賀和約之御締結候。仄聞仕候處、右ハ諸條件共ニ国人の満足無疑事ト奉存候、望蜀ノ心ハ有之者も候ヘケレとも常識を有し候者ハ孰レモ満悦ノ如く相見受申候。特ニ商工業ニ関スルケ條ノ如キハ実ニ将来莫大ノ利益ニテ一省之地ヲ取り候ヨリモ幾倍ノ洪利ト奉存候、我国ノ富源ハ一ニ此ノ條款ニ存スル様奉存候。御談判ノ惠澤ハ将来絶大之賜ニ可有之候、外ニハ外国ノ窺窺、内ニハ好戦者ノ意気込、加之ナラス狂児ノ中道ニ事ヲ阻止スル杯是迄色々ノ障碍有之候間ニ御立ち被成候御配慮の程御察申上候、全ク御折衝ノ功ニテ斯る満足の結果ニ至り候段、将来も公平なる国人ノ刻銘シテ永ク不忘ノ御勲績ト奉存候、先ハ御欣申上度如此に御座候。草々頓首⁵²⁾。

これは日清戦争時期において、矢野が直接日清戦争について個人的な感情をこめている発言である。条約締結に際して喜びと満足感を感じるのは当然である。しかし、矢野には自国の自慢と他国への軽蔑は見られず、「外ニハ外国ノ窺窺、内ニハ好戦者ノ意気込」とより広い視野で日清戦争の勝利の「外国ノ窺窺」と「好戦者ノ意気込」と分析した。このような姿勢は様々な口実で戦争を誘導する福沢とは異なる。同じ条約締結について、4月17日、福沢は「平和談判の結局に就て」において、「日本人の支那帝国を視るは恰も第二の朝鮮にして、其頑迷界より導ひて文明に誘はんとするの外に他志…なし⁵³⁾」と中国に対する軽蔑を表している。矢野のような「外」と「内」に対する反省もなくて、一貫して尊大な態度がうかがえる。

矢野の国際事情について発言が最も多い時期は、駐清公使に在任する期間中（1897年6月－1899年11月）と日露戦争の時期である。しかしながら、この時期の福沢は、1898（明治31）年9月と1899（明治32）年8月に二回病に伏して健康状況が悪かったため、日清戦争の時ほど目立った活動はなかった。そして、日露戦争の時、福沢はすでに死去していた。

1904（明治37）年、中国東北と朝鮮半島を主戦場とした日露戦争が勃発した。矢野は日露戦争について国際関係論説を多く著した。例えば、1904（明治37）年3月『戦時書報』3号に投稿した「戦時に於て、最も恐るべく、最も注意すべき事の一」では、長く戦争を続けるためには、長く国力を養う必要があると論じた。同年4月『戦時書報』6号に日本が欧米列国の同情を得た原因を「異種異教の人たるにも拘はらず、其実は、人道の上に於て、學術の上に於て、政体の上に於て、人權の上に於て、欧米の文明国人に同じきこと、却て露西亜人よりも大なるものあるに因らざるを得むや⁵⁴⁾」と論じた。

矢野は日露戦争に対して列国の態度を決めたのは、列国それぞれの利益だけではなく、専制抑圧の露国と自由文明の日本国によって行われた戦争だったため、露国の同盟国フランスで、自由文明を本義とする党派の人物たちが露国より日本に同情を示す者がいると述べた。矢野が列強国による中国領土の奪

52) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第八巻、9頁。

53) 富田正文・土橋俊一編『福沢論吉全集』第十五巻（岩波書店、1971年）、133頁。

54) 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻（大分県教育委員会、1997年）、486頁。

取という日露戦争の本質と、侵略された中国の国際境遇を述べなかった原因は、時代の制限と当時の日本の社会的風潮にあると考えられる。

しかしながら、1911（明治44）年6月、矢野は『大阪毎日新聞』に「支那憲政の前途」を投稿し、

支那に於て、立憲政治が、果して完全に行はれ得べきや否やとは、一の興味ある問題なり、而して余輩は之に答て云はんとす、無論完全に行はれ得べきのみならず、或は日本よりも、ヨリ多くその賜を享け得べしと、然れども亦其の目的を達するまでには、日本に比して、或は幾倍の犠牲を拂はざるを得ざるべしと⁵⁵⁾。

と「支那」の政治制度の改善に希望を寄せた。

また、1920年（大正9）年『東京日日新聞』に「支那の前途」を投稿した。「支那の前途」では、

支那は東洋文化の淵源で、我国の如きも、久しく其お陰を蒙りしは争はれぬ事実であり、殊に同文同種の間柄故、吾々は常に中心から、支那の繁栄を希望して、前途の隆運を祈り、可成惧に手を携へて、東洋の幸福を得ようと思ふのである、然るに支那人が世界優秀の民族であり乍ら、頃来の不始末は存外にて、何事も吾々の期待に反すること多きは実に痛恨すべきである⁵⁶⁾。

と書き出し、明らかに「支那」に対する同情と希望を示した。⁵⁷⁾

1905（明治38）年9月10日、日露戦争が終わった頃、矢野が『近事書報』に連載してきた『出鱈目の記』が近事書報社より刊行された。『出鱈目の記』は戦時の産物にもかかわらず、その内容は詩歌、歴史、文物などに関する雑記の文章が多い。ただ、日露戦争が開戦した後、『出鱈目の記』には戦争を主題とした文章が増えた。「特に日露の戦は、西欧東亜、二強国の興廃を賭すべき大事にして、其の題目の偉大なる、之の越ゆべきもの無かるべく、又諸方面出来事の中には、壮烈悲惨を極むるもの多し、例せば金州丸の如き、旅順三回閉塞隊の如き、金州南山突貫の如き、之の他国人に語るも亦た為めに涙を掩はざる者なかるべし。」⁵⁸⁾と、戦争の悲惨を述べる一方、戦勝によりもたらされた喜びも表した。

日露戦争はそもそも列国が中国の領土と権益を争う侵略戦争である。日露戦争勝利がもたらした喜びを感じた矢野に対して、侵略あるいは国権拡大に対する認識の如何を分析するのは避けられない課題である。矢野が認識していた「植民」というのは、「自主主義の発生に最も便宜なるものにて、西洋古今の自主主義は、皆な多く植民地の産物たり、抑も旧邦に在て、幾分か智識の発達せる人民が、未開地に移りて新国を建つるに当っては、諸人皆な平等の地位に立つが故に、自然と参政権を望むの情あるを常と

55) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、534頁。

56) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、550頁。

57) 矢野龍溪の支那についての論説は歴史的考察を基に政体制度、内治と外交問題などを分析する特徴があり、後1914年に出版された内藤湖南の『支那論』においても、同じ思想構造が見られる。内容的には『支那論』がもっと濃厚で濃密に見られ、中国文化に対する評判は矢野龍溪がもっと明白に敬意を吐露したように見られる。

58) 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻（大分県教育委員会、1998年）、176頁。

す、従って自治主義の実行と為り、漸次に発達して完全の域に進む、是れ必至の数なり」⁵⁹⁾と述べたように、文明国家が未開地を開発する行為であり、世界全体の発展を促進する行為である。

矢野は日露戦争の戦中に、日露戦争は専制国と立憲国の戦争であり、人権と平和を尊ぶ立憲国の日本が戦勝国になれば、世界の平和を守り、全世界人類の新運を守ることに役立つと説き⁶⁰⁾、人類の平和と福祉の構築に責任を感じ、戦後も、「ルーズベルト (Franklin Delano Roosevelt) 氏の教書⁶¹⁾は、人類の幸福に関して、実に著大なる宣言にして、ワシントン以来、幾世の大統領中、未だ此の如き、壮絶の教書を発したる者あるを見ず。…米国大統領のみは独り人道と平和との為に、他国の事に干渉すべしとの一大旗幟を推立てたり。何ぞ其の壮絶なるや」⁶²⁾と従来のモンロー主義を捨てた米大統領ルーズベルトが宣言した人道と平和の旗幟を擁護する意向を示した。米国の宣言を「欧州外交家の嗤笑する所なれども、其突飛なる所、却て大に成功する場合なきにあらず、又或は不成功と知ても、世界の為め、人道の為め、之を提議して憚らざることあり、日露戦争に於る平和の仲裁役に立ちし如きも、此事たる本来米国に左迄の利害あるにあらず、然るも尚ほ人道の為め (一は其国名誉の為にあらんが)、之を提起して、成功せり」⁶³⁾と述べた矢野は、国益より人道を重んじており、無邪気とさえ思える。自国の国益を行動の旗幟とすることは、外交界における不変の宗旨であり、特に、欧米列国における国際地位を求めていた当時の日本の社会風潮の中で、外交官であった矢野がこのような外交官らしくない発言をしたことは、不相応であったが、『浮城物語』や『新社会』で世界平和を強調してきたように、それは全人類の幸福と全世界の平和が矢野の最終的な理想だったからではないかと考えられる。

3、「中国文化」への注目

駐清公使を担当してから、矢野は国際事情により一層関心を寄せた。特に中国を話題として取り上げた論説が多い。1899 (明治32) 年12月、つまり、駐清公使を辞任して帰国した後の翌月、矢野は『交詢雑誌』に「矢野公使の談話」を公表した際、中国における不便な通貨制度を治療すべきだと論じ、最後には「物価は騰貴して人民は種々の困難を蒙るも矢張り天然に放任して世界の勢に支配せしむるの外なき乎。是等は実に経済家並に実業家等最も研究を要すべき一新問題ならんことを疑はずと云々。」⁶⁴⁾と中国における経済政策の問題を提起した。

また、1900 (明治33) 年3月25日、矢野は早稲田大学で「支那事情一斑」と題する講演を行った。講演はなぜ支那の有力な人達でも一般的な国民でも改革の緊迫性が悟れないかを論じた。それはまず「政府

59) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、317頁。

60) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、493頁。

61) 1904年にアメリカの大統領を再任したルーズベルト氏は平和的の仲介者として、日本に財政面など様々な援助を提供したほかに、日露戦争に関しては、日露の勢力均衡での平和と法的正義を要望し、道徳的正当性を強調した。矢野龍溪が言った教書は1905年次教書である。

62) 大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻 (大分県教育委員会、1997年)、449頁。

63) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第七巻、176頁。

64) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、470頁。(「矢野公使の談話」、1899年12月20日付『交詢雑誌』555号)。

の仕組み」、つまり「支那政府の組織は凡ての権力を成可く一人の手に集めないやうにしてさうして之に終始相引合うて往かう」という仕組みと、「一般の国情」、つまり「俗を守ることを専一とする」、「風俗を全うする事は国を全うすると言う」考え方に問題があるからである。矢野は「一体其国の亡びる時には其国の祖先が立てて置た法は立派であるけれども、法は法にして此法を運用する上に至って、法と相背いた事をしてとうとう一人の手に権力が帰して鼎は移すと云ふ訳である」⁶⁵⁾と、中国の全般を否定するのではなくて、祖先が定めた法を評価した上で、問題を分析したのである。

そして、「所が支那人は公平に言ひましたらば古く開けて居ただけ一体の人が余程利口なのは、私が公平に局外人として見たならば支那人と云ふ者は決して愚鈍な民ではありませんぬ、なかなか利口である、有力な人は勿論又人民も分らぬ事はないのである。」と「支那人」を積極的に評価した。また、同年7月10日、矢野は『慶應義塾学報』に「支那人と愛国心」を發表し、「一口に言ひますと支那人は全体伶俐の人種で、国も古うございますから中々伶俐であつて、決して卑むべき人種とは思ひませぬ」⁶⁶⁾と発言した後、風俗、礼儀、道徳を重んじ、土を重きに置かない中国人の性質を論じた。全文は「今日になって見ると、成程昔は支那以外に居る人民はどちらかと云ふと、支那よりは開けぬ野蛮国で支那の方が文明である」⁶⁷⁾と述べたように「支那人」と「支那文化」を尊重している立場が伺える。

一方、矢野は中国の伝統文化に対する馴染み深さがうかがえる。矢野の最も代表的な『経国美談』における章回体の形式構造や瑪留の人物設置などから体现した中国文学との馴染み深さはもちろん⁶⁸⁾、矢野の他の作品、例えば、『西遊漫記』、『出鱈目の記』、『龍溪随筆』などの随筆体の作品には、中国の伝統文化に関する話題が無数にある。題目だけ見れば、『西遊漫記』における「玄德」、「孔子」、「元の帝室の宗教」など、『出鱈目の記』における「支那人の詩思」、「西施の行方」、「義之の千文字」など、『龍溪随筆』における「支那の政論」、「支那の地勢」、「支那の南邊」など内容が政治、地理、文化、歴史に渡って幅広い。

しかも、細かく論じているので、内容の深さもうかがえる。例えば、『出鱈目の記』「暖簾」には「暖簾と云へるは本来支那語なるべし、支那語にては暖の字を「ノン」と読む、今の暖簾は即ち「ノンレン」の語を詰めたる物にて、蓋し其の初め長崎邊より始まりしものならむ歟」と一語の由来に注目し、また、『一生不賦海棠詠』には「支那の蜀は、海棠の花にて有名なる土地なり、然るに詩人杜子美が同地に在ること数年なりしに、曾て海棠を詠ぜず、故に東坡の句にも、恰是西川杜工部、海棠雖好不留題とあり又鄭谷も浣花溪上堪惆悵、子美無情為發揚の句あり又放翁なりしか（確とは記せず）、一生不賦海棠詠、亦是微臣憂国心等の句あり」と一語に派生した詩を引用している。矢野の博学と中国文化の熟知を認めざるを得ない。

65) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、473頁。（「支那事情一班」、1890年3月25日付『早稲田学報』37号）。

66) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、475頁。（「支那人と愛国心」、1890年7月10日付『慶應義塾学報』29号）。

67) 前掲、大分県教育委員会編『矢野龍溪資料集』第四巻、473頁。（「支那事情一班」、1890年3月25日付『早稲田学報』37号）。

68) 拙稿「矢野龍溪と『経国美談』について」（『文化交渉』第7号、2017年）、pp269-286に詳しい。

おわりに

矢野龍溪の生涯は福沢諭吉の門下生になることで転機した。慶応義塾入塾時代の矢野は、福沢が創設した当時の第一洋学塾で西洋文明の全般に触れ始め、福沢が書いた論文を読み、福沢の思想理念に深く影響されたことはまぎれもない事実である。例えば、駐清公使時代に、矢野はチェンバレンをチャンベルラインと表記するような、いわば「福沢式」英語に対して、林権助に揶揄されたことがある⁶⁹⁾。

また、1874年6月に矢野は福沢が民衆啓蒙のために創刊した『民間雑誌』の第三号に、自分の処女論文「商ニ告グルの文」を発表した。この論文は「人口三千万ノ一国ニテ他国ノ交際ナキ世ニハ、喰フモノモ三千万着ルモノモ三千万、其人数二限りアレバ其費ス高モ限りアリテ非常ノ富ハ致サレズ心苦シキ世ノ中ナリシニ」とあるように、『民間雑誌』の第一号に掲載した福沢の「農ニ告グルの文」との題目と似ているだけではなく、その文体も福沢の文章を模倣する跡が明らかに見える⁷⁰⁾。

しかしながら、矢野の中国およびその文化に対する親近感、自分の生涯に深く影響した恩師福沢とは明らかに異なる。矢野が慶應義塾にいた時、慶應義塾には、十二の階級に分けられた生徒たちの中は、五等以上の上級生が五等以下の下級生を教えながら自ら独学研究するという規則があった。福沢はあまり自ら教授をせず、一週間に二回ほど一般向けの西洋文明史の講義をしていた。矢野は福沢の啓蒙により、西洋文明という新しい領域に触れ、福沢に深く影響されたとはいえ、福沢の思想をそのまま自分の思想体系に移植したのではなく、1871（明治4）年慶應義塾に入塾してから、歴史書、政治書、経済書などを読破し、自由に研究に専念することにより、自らの思想体系が形成されていたと言えよう。

69) 岩井克人編・林権助述『我が七十年を語る』、第一書房、1935年。

70) 前掲、野田秋生『矢野龍溪』、17頁。